393
128

對日感情の偽らざる告白
西伯利出兵の總勘定

始

對日感情の僞らざる告白
西伯利出兵の總勘定

10.2.8

讀賣新聞社

（以印刷代謄寫）

393-128

外交不振は目下の輿論である。而して我國の對外外交としては、支那と西伯利亞が最も重要である。然るに我對支外交としては、我讀賣新聞が、新春以來續載し來つた支那人殷汝耕氏の『對日感情の僞らざる告白』は最も參考とすべく、對西伯利亞問題に就いて、是亦讀賣新聞の過日連載した『西伯利亞出兵の總勘定』が最も眞相を穿つて居ると思ふ。仍つて吾人は此兩篇を印刷に附して諸氏の御參考に供する。

大正十年一月

大正
10 2 14
内交

對日感情の僞らざる告白

二

殷汝耕氏

惟ふに最近世に於ける日支問題を回顧する時は、日清戰爭から始めなければならぬ。此戰爭は謂ふ迄も無く日本が勝つて支那が負たのである、併し之れを日本側から見たら何うか知らぬけれども支那側から見ると支那全體が負たのでは無い、支那の一部即ち日本流に云へば軍閥とも稱すべき當時の政府者が好んで戰ひ而してとう〳〵敗けて終つたのである支那が國民を擧げ國力を賭して戰つて而して敗けたのでは無い、とかう私は見て居る。

それだから此の日清戰爭が終つて後、支那は日本の爲めに領土を割かれ、多額の賠償金を負擔せしめられたけれども當時の政府者の如き一部少數の間に於てはイザ知らず支那の國民全體としては殊更に日本及日本人を憎む又は之を讐敵視するといふ感情は無かつた、全然無かつたと云つても過言とは思はれぬ程である、支那一般の國民は自國の少數者と他國との戰爭を横から靜かに眺めて居たともいふ可き立場に在つたのだからソウした感情の起らぬのは固より當然な事なのである、否獨り日本に對して反抗の眼を向けなかつたのみならず寧ろ一歩進んで日本を尊信し日本を先進國と見て之れに跟隨して自國の頽勢を挽回しなければならぬとの一脈の生氣が國民の頭に湧いた樣に見える、即ち支那國民は日清戰爭の爲めに頓に覺醒したのである、而して其覺醒を與へた日本に對し私かに敬意を拂つて居たと云ふ事が出來るのである、兎に角日清戰爭は支那一般の國民をして日本を憎む感情を釀さしめず寧ろ日本は依るべく親しむべく近づくべきであるとの信念を促したのは事實である、彼の變法自彊の政策なるものは此信念から萠生したのである。尤も變法自彊も其精神に於ては至極適切なるものがあつたけれども周圍の情勢が此精神を暢達せしむるには餘りに切迫し過ぎて居たから

さしもの名案も事實の上には更に具現せず國勢陵夷列國の壓迫は年と共に愈々加はるといふ有樣であつた此時に起つたのが拳匪事件である。

抑も拳匪事件は、曩に日淸戰爭に依りて日本の爲めに覺醒させられた支那國民が、變法自疆策に出でんとする決意を持つて居た程で、偏に國運の隆昌を期して居た矢先に、外國の壓迫が激しくなつたものだから理性の平衡を失して立つた謂はゞ衝動的反抗であつた、之れは相手が日本ばかりではない獨、露、佛、米、伊、墺等諸國を含む一般外國に對する反抗であつたのである、勿論此反抗は時勢を見るに迂拙なる連中の仕出來した事で支那一般國民の齊しく鋒を取つて立つたといふので無かつたのは兩江總督劉坤一、湖廣總督張之洞、山東巡撫袁世凱等當時の有識者が反對したのでも知れる唯茲に注意しなければならぬのは拳匪事件に依りて支那の親日傾向が著しく其角度を增した事である、事件中支那は外國と戰つた居り其外國の間には日本も含まれて居るのであるが諸外國軍の間に在る日本軍の特に規律正しき事や地方民家に對し割合に節度を失はなかつた事や種々他の外國と異つた行爲を目擊した時に支那人はドウ思つたかと云ふと日本は吾人の敵では無い寧ろ味方である、之れと爭ふべきでない寧ろ和すべきである、と氣付いたのである、果然拳匪事件が終りて支那が自分で自分の國を整理しなければならぬとの强い風潮が國民の間に流れ出した時其模範を何國に取る可きかを考へて直に之れを悉く日本に求めやうとした、政治でも經濟でも軍備でも皆其制度を日本に模倣せんと企てた、而して中央政府の要所に傭ひ入れる顧問、敎官といふ樣なものは凡て日本人の間に物色した、各省は相競うて日本に留學生を派した、之れは決して他動的では無かつた、日本から勸められたのでは無い他のドの國からの意見に從つたのでも無い、徹頭徹尾支那が自發的にやつた事である、支那は當時如何に日本に信賴するの深かつたか私は殆ど之以上の說述を要しまいとさへも思ふ。

彼れ是れする其の內に日露戰爭が勃發した、此の戰爭は日本と露西亞とが支那の領土たる滿州に於て主として戰つた戰爭である、日本から謂へば日本の自衞上の必要から

來たものであるけれども支那から謂つても其領土を荒されて居る以上利害關係が無い事は勿論無い、而も支那は日本と露西亞と孰れに多くの傾きを以つて居たかと謂へばそれは固より日本である何故となれば露西亞は其當時迄支那の邊境を侵し尙飽き足らずして漸次南下して滿洲の突端に牢乎たる堅塞を築いて極東の根據地を新設したといふ狀況である、支那としてドウして之を快く思はれやう、機會があれば斯かる暴戾な外勢を領土から驅逐したいとの熱求は國民の頭に火の樣に燃えて居たのは事實である此時此際に日本が正義の軍を起したのである、支那の日本加擔は自然中の自然で無くてはならない。在東京支那留學生が旺に日支の同盟を宣傳し其協力を高潮したのは實に其當時であつて甚だしきは留學生中から義勇兵を募つて日本軍に從軍せしめんとする企圖すらあつた、而して此親日傾向は啻に留學生ばかりでない、國內に於ては多くの共鳴者があり少くも露西亞の爲或は支那の爲に日本軍の覆滅を祈つたものは唯の一人も無かつたのである全國民を擧げて日本軍の勝利を祈求し又確信して居た、之れ露西亞勢力の南下更に大きく且つ適切に謂へば西力の東漸を阻止するは日支兩國の使命であつて以て東洋の平和を兩國の力に依りて確立しなければならぬとの根本精神の發露に外ならなかつたのである。

されば最早此時に及びては、支那に取ては日本は讐敵で有りやう筈が無く、後進國同僚國でも無く、從つて憎惡、怨恨、羨望、嫉視の的とはならず飽迄も日本を先覺者として好師傅として過去の舊き支那は趁ふ事が出來ない、が併し將來の新しき支那は日本に學ぶ事に依り日本に倣ふ事に依り打立てられなければならぬとの根强い底堅い信念は支那國民の一切の國民的活動を其動機の點で支配するに至つたのは否むべからざる事實である。夫れと同時に日本及び日本人は此强堅なる支那及び支那人の信念を正當に受け容れて呉れるであらう、而して出來るだけ吾人の欲求を滿たして呉れるであらう、而して西洋よりの壓迫を取除き支那の社稷をして安定せしむる爲めに一臂の力を吝まないであらう、同じく東洋に國を成して居る兩國では無いか、無下に支那の希

望を排否するとは如何にして想像し得やう、と支那國民は悉く斯く期待して居た。所が遺憾な事には日露戰爭後の日支交渉の跡を回想して支那の此期待は美事に裏切られ從つて曾て支那の日本に對して懷いた信念は今日は著しくグラ付いて居る事に注意の眼を注がなければならぬのである、私は此遺憾の念から次第に苦悶に入り込む事をさへも感ずる、而も如何にして此苦悶の情を說明すべきかを知らない。

斯くして日露戰爭後に於る日本の支那に對する態度を一言にして覆へば餘りに驕慢であり一面餘りに冷淡である、些細な事ではあるが日露戰爭の最中から日本へ渡來する支那留學生は月を追ふて增加したが彼等は皆日本に依りて近世文明の眞髓を掴み其醍醐味を吸收するのが彼等の目的であつて何も斯も日本に模倣せんと努めるのが彼等の實際であつた、斯る駐日留學生は一時二萬人にも達した事があり之れ以上殖える迄も減る事は有るまいと思はるゝ狀勢であつた、而して是等留學生は必ずしも支那の都會地とか上海の樣な商埠地とか比較的文化の惠に霑へる地方から來たものとは限らない

滿遍なく廿二行省から來たのである、縱ひ邊陬の省からの留學生でも管內各縣より平均に候補者を選ぶといふ有樣であつた、斯くして留學生派遣の各省は彼等の歸省に依りて管內を開發せしめ得べしと信じて居た、之が爲め其の地方が日本化する事があつても壓ふ所で無いと覺悟して居た、寧ろソウあらま欲しく期待して居た。ところが斯かる鄕人の期待を背負ひ斯かる目的を懷にして渡日した留學生は果して日本の官憲及び國民から正當に受容れられ又取扱はれたらうか、私は此點に於て頗る疑なきを得ないのである、まことは彼等は悉く皆失望して歸つたと言へる、日本の學校は彼等留學生の爲めに日本の學生と同等の條件で同等の敎育を授けたとは思はれぬ、多くは彼等の爲めに營利的敎育を施さん事を承諾したに過ぎぬ、甚しきは支那留學生の營利的敎育を行ふ目的を以て新設された學校さへも有つた樣に聞く、之に對して日本官憲は何等の施爲をも試みはしなかつたかに見える。一方又一般國民は日淸戰爭當時よりの惡い感情即ち支那人は日本人より一段劣等な人種であるとの感情は全く拂拭されず折に

觸れ事に臨みて此惡い感情は彼等留學生の目と耳とを刺戟した、彼等としては決して快い感情を抱き得やう道理は無い。日本人は驕慢であり冷淡である、少しも和かな所も溫かな所も無い、何となく居心地が惡い、長く住むに堪へぬと考へて始終戰々競々として居た、トドの詰りは横濱から神戸から彼等は日本を逃げ出して家鄕に歸つた彼等留學生の心は獨り彼等だけの心では無い、實に支那國民の心である、外交的にも經濟的にも支那の日本との交渉に關する限り此心を無視する事は到底出來ない、日本の驕慢と冷淡とは隨時隨所に歷然として指呼するを得るのである。

思ひきや日露戰爭後、列國は支那に對して相爭ふて勝手に勢力範圍の設定、利權の獲得といふ樣な事をやつた、支那に取りて望ましき事で無いのは明白であるが、去り迚支那が自力で之れに反抗する程の實力を有しない故に此侵逼を西洋からの不合理な暴力である事と認めつゝ暫らく隱忍するの已むを得ざるものがあつたのである、併し日本が暴力を支那に向ひて揮ふ列國團の中に含まれて居やうとは全く思ひ設けなかつた

啻に滿洲の事ばかりで無い、其他の方面に於ても他の列國から受ける暴力的壓迫と同じ程度の壓迫を日本から受けやうとは支那の眞に期待せざる所であつた、併し事實は事毎に此支那の期待を裏切つて居る、日本も西洋も同じく支那を壓迫する而も壓迫の手を緩めない、是に於てか支那は遂に日本を疑惧の眼を以て見るに至つたのである、日を逐ふて此疑惧は濃厚になつて行つたのである。

而かも日本には這個の眞消息は、恐らく解つて居なかつたのではあるまいか、一部少數の識者の間には、薄々乍ら茲に感付いた向もあつたかも知れぬが、日本國民の大部分は此點に對する反省が全然缺けて居たのであるまいかと思はれる。けれども此時迄は支那は日本を怨み且つ疑つてこそは居たが殊更に日本を排斥する迄に感情が行き詰まつては居なかつた、それだけ緊張した反感を有つては居なかつたと云つた方が可いかも知れぬ、日本の識者は曰ふ『日本は好んで支那を壓迫するのではない、日本の世界に於ける立場を顧慮するが爲め列國と協調する見地から支那に於ても一緒に仕事を

する結果其弊の極まる所會々支那を壓迫する事となるのである世界の大勢上日本單獨の行動を支那に對して許さるゝならば無論壓迫する筈は無い』と、日本は日本の立場を顧慮するが爲支那を壓迫するのだと云ふ、隨分利己主義な冷淡な言分であるがそれはそれとしても此辯解の中には日本として無理からぬ點も有るのだらうと考へ一應之れに耳を藉したのであるが此時に方り歐洲の戰雲愈々急にして遂に彼の如き大戰が勃發した、其結果東洋に於ける西力は一時全く各其本國に引き上げられた支那は思ふ『日本の從來支那に加へて居た壓迫は西力の侵漸があるからである、西力さへ無くなれば日本は支那の味方で無くてはならぬ、今や西力は東洋の天地から影を隱して了つた、今こそは支那は日本と共に造次顚沛にも、忘るゝ事の出來なかつた對世界的大方針を樹つる時ではないか』と此思想は支那國民全體の少くも支那の新人の懷いて居た牢乎たる思想であつて現に之れを意見として吐露した者も二三にして止まらなかつたのであるが开は眞に彼等中心からの熱叫であつたのである。所が日本國民の大多數は此思想に念到せず況んや此熱叫を一場の空言なりとして風馬牛と一般に取扱ひ依然として舊來の惡い感情に支配されて居た而も日本は西力を失ひて支那と提携するどころか却つて反對に西力が消えたから大手を揮つて思ふが儘に自國の勢力を支那に扶植する事が出來る今こそ支那侵略の絶好機會であると考へたかに見ゆる、例を擧げて說明せよとならば出來ない事もない彼の廿一箇條の要求の如き其主要なるものゝ一である。

嗚呼廿一箇條、日本の對支二十一箇條要求は日本として寔に已むを得ざるに出でたのかも知れぬけれども支那から見ると今日の隱暗な日支關係を釀成した近因は此問題に在るのである、此問題に依りて支那は決定的に日本を憎惡し之れを讎敵視するの事情を明に懷くに至つたのである『從來の日本の對支政策は濃厚なる帝國主義的色彩を帶びて居る、常に日本本位である、口にこそ支那の爲めに謀りて忠なるが如き事を言ふけれどもドウだか當にならぬ、が併し眞逆大した事もあるまい、日本の內面的事情と

して內閣の更迭といふ事を考へねばならず從つて對支方針の一新といふ事にも考へ及ぶ必要がある、方針が一新した曉は、昨非今是、今迄一時邪道に踏み込んでも間も無く正道に立ち返るだらう』と、斯くの如く支那國民は考へて日本を見る眼の前に叢る疑惑の雲に鎖され乍らも尙疑惑の雲の奧に一縷の墓ない望みを擧げて居たのである、それは如何に日本は帝國主義の國だの自己本位の國だの云つても之と云つて別段確な證據は無い、言ひ換ふれば夫れ等の主義も方針も唯日本にそれがあるだらうと爲すに止まり如實に具體的に支那の上に發現したのでは無かつたのである、ところが廿一箇條の要求に依りて今迄姿を見せなかつた日本の本體がマザ〳〵と支那の前に顯れた、之れを支那の側から謂へば今迄の疑惑は一掃されて眞實を掴む事が出來た、而かも其本體たるや、其眞實たるや、支那に取りて實に戰慄に値するものであつたのである、支那は之に依りてパンの代りに石を、石の代りに熱鐵を與へられた感がある。

日支親善は虛僞、日本政府當局の要求は徹頭徹尾帝國主義的である、自己本位である、條文を見ても解る通り飽迄支那に對して强壓を加へんとしたるものたらざるはない、其滿蒙に關する條項の如き日本が滿洲に優越の地歩を占めるとて果して支那を獨立國と認めての上の要求なりや否や頗る疑はざるを得ぬ、南滿に顧問敎官を置くに政治財政軍事甚だしきは警察に就て迄も日本人を傭ひ入れなければならぬとなつては最早支那の主權の存在を忘れたので無いかを怪しまざるを得ないのである凡そ列國が支那に對して無理な要求を提起して之を强要した事は之迄にも一再にして止まらなかつたのであるが日本の廿一箇條要求程無理解な沒人道的な苛辣極まる要求は無かつた、日本は支那が曾て恰み且怖れた西洋人さへ爲し能はざりし所を爲したのである。剩へ其要求に方り日本の取つた外交上の態度は餘りた傍若無人であつた、外交文書の提出は外務部を經由するのが外交上の慣例であるに拘らず日本は此慣例を破りて直接大總統に提出し次で要求の一部容れられざるに方りて最後通牒を發して支那をして遂に屈伏の餘儀なきに至らしめた。日本は支那の獨立を認めない、屬領視して居る、啻に屬領視

して居るのみならず之れを愛撫せんとはせず却て殘酷に虐げる、原因は如何にあるにせよ結果に於てソウである、支那國民たるもの豈晏如として一縷の望をだも日支親善の上に繫ぐ事が出來やうぞ、支那國民は是に於て乎決定的に日本を讐敵なりと認めた而して口々に曰ふ『日支親善は虛僞なり』と、斯くして支那は後來拭ふ可からざる印銘を日本を觀察する心の上に刻み付けた、此印銘は今日でも其儘殘つて居る。

爾來日本の支那に對する感情は、舊態依然たりであるが、其間に支那の對日感情は、年に愈々、月に益々惡化の度を加へて行つた、唯一時此惡化し行く對日感情が柔げられたかに見えた事がある、夫は袁世凱が帝政を布かんとするに方り日本が各國の嚮導となりて其中止を勸告した時である當時支那は前述の如く日本の援助を以て國礎を築き上げやうとの希望は根抵から覆へされた爲め一面非常に失望すると共に他面之れと云ふのも畢竟支那に自治獨立の實力無きに因るのであるから見樣に依りては罪は日本に在らず支那に在る、故に大戰を好機として暫く隱忍して專心一意急速に內政の整理

をしなくてはならぬそれには列國の內政不干涉を前提とするのであるから極力外力の影響は支那の內政から驅逐する必要がある世界が斯かる考への下に動いて居る矢先袁の帝政宣布が出現したのである支那國民は驚いた驚いたのは中外同じであつても支那に取りては驚いた以上に困つた、袁の行動は全然內政に關する、而して當時の反袁勢力は袁を押し倒す程强くは無い、左り迚外國の內政干涉は素より喜ぶ所で無いから袁は其欲するがまゝを行ひ得る地位に居つたのである、支那國民は此ヂレンマに陷りて頗る困惑したのである其處へ來たのが日本の帝政中止勸告なのである支那國民は非常に嬉しく思つた、日本は從來外交上種々支那の爲に謀りて甚だ忠ならざる事をやつて居たのであるがそれが縱ひ帝國主義的自己本位の政策であつたにしても日本としては世界に對抗する上に於て已むを得ざるものだつたに相違ない、併し乍ら支那が危急存亡の秋即ち今回の袁の帝政宣布の如き場合には進みて支那を援助する意思が內面に生動して居るのに相違ない、果して然りとせば此機に乘じ竿頭一步を進めて日支の提携

を圖るに如かずとコウいふ事を唱へる人もあつた。けれども之れも一場の空しき夢であつて袁の死後日本の態度はガラリと急變し支那の官僚軍閥と結託するに及びて益々夢の夢たるを悟り苟且にも日支提携の可能を信じたるは輕卒も甚しいのを悔い支那の國民は失望の上に更に失望を加へたのである。

援段政策に隨して袁の施爲は帝政問題ばかりで無く之れを内政的に見て決して善くは無い、併しそれは日本には何の關係も無い事である、日本に關する限りに於ては外交上の事であるが袁の對日政策は支那側から謂へば大して惡いとは思はれぬ、併し日本から見れば甚だ惡い、袁は屢々日本の意圖に反對する日本に取りては袁は邪魔物である、故に日本が例の帝國主義利己主義の行動を支那に向ひて取る事を續くる爲めには此邪魔物を取り除けなくてはならぬ、それには正面から袁を苦しめる手段もあると同時に裏面から袁の政敵を使嗾して袁の立場を脅かす方法もある、日本は其双方を執つた正面から行つたのは帝政中止勸告であつて裏面から行つたのは反袁派との結託である、要するに日本の帝政中止勸告は支那に對する親切から出たのでは無く矢張り自己の野心を遂ぐる爲めに親切の假面を被つて居たに外ならぬのである、支那が假面の假面たるを觀破した時失望の上に更に失望を加へたのは固より怪しむるに足りないでは無い乎、況んや假面の假面たる事實が寺内内閣の露骨なる援段政策に依りて明白に裏書せられたるに於てをや。

その中に就て援段政策の著しき特徴は謂ふ迄も無く數億圓の借款である支那全國民の永久の負擔となるべき數億圓の金を一部軍閥の利用に供した事である日本の政府當局に斯かる借款を以つて支那に親切を盡したのだと謂ふ、賴りて以て支那をして經濟的進歩を促す外他意なしと謂ふ、けれども支那より見れば此數億圓の金は些かも支那の國利民益を計る爲に使消されては居らぬ。全然一部の軍閥に利用せられて徒に内亂を助長したといふ結果を見たに過ぎない、日本政府當局者中此結果と借款とは無關係であると強辯する非常識極まる向は別として中には此因果だけは認めつゝ唯斯かる結果

を豫期して借款に應じたのでは無い、最初の親切は依然最後の親切であるといふ風に辯解する向も少く無いのであるが彼の如き支那の政情の下に二三の武人を扶けてそれで結果如何になるかは問はずして知りたる話で所詮は日本の意圖は少數軍閥の利益の爲めに借款を許し彼等の操縦し彼等の支那に於ける地位を利用して遂に支那全體を左右せんとするに在つたのは一點の疑を容れざる所である。支那の國民は思ふ『朝鮮の亡ぶるや初め日本は其一部の懷柔に全力を盡したそれから漸次腹心の徒を增して行つて而して到頭朝鮮併合を實現し了せた、知らず日本は支那を第二の朝鮮と爲すのであるか』と、若し夫れ端的に謂ひて日本の對支借疑は單なる親切を動機とするものであつて他意なきものならば何故に借款の蔭に利權を漁つたのであるか、親切づくで金を貸すならば金を貸すだけに止める筈である、代償として利權を收めるといふのは何としても了解に苦しまざるを得ぬのである、其頃日本朝野の間に流行語となつた日支親善も可い加減な出鱈目より考へられず日本は西力より支那を引上げた虚に乘じ名を親善に藉りて火事場泥棒を働かんと企てたのであると認められても辯疏の辭はあるまいと思はれるのである。

一方經濟的援助と稱して、支那國民全體の負擔に於いて一部軍閥肥やしが內亂助長の素因を作つたに過ぎぬ所の彼の多額の借款を容るゝと共に他方軍事協約なるものが日支兩國の間に取結ばれた。軍事協約は最初嚴秘に附せられ居り內容は如何なるものか正體の解らぬものであつた、故に支那國民は初めは唯何となしに大なる脅威を感じたに止まるのであつたが次第に其內容が明白となるに從ひ該協約に反對するものが多くなつた、反對の理由を一言にして覆へば其必要を認めずと謂ふのである、日本が支那と協力して獨逸勢力の東漸を防ぐといふも協約締結後久しからずして其必要か無くなつたに拘らず寺內內閣以來現內閣に於てするも依然踏襲し之を廢する模樣もなく縱し廢止の口氣を洩らしたとしても如何にも未練がある樣に見える其間に支那の北方軍閥は右に借款を利用し左に軍事協約を盾として其の勢力を張り問題の除樹錚

の如きは之れが爲め庫倫に於て拔く可からざる勢力を養成した事實がある、之れ日本が該協約に依りて支那に軍事的勢力を扶植し支那の死命を制する或種の政策を施さんとして居るのではあるまいか、若し然らずとせば支那國内の輿論が其必要なしといふなら直に廢すべきであつて寺内内閣は協約の責任者であるから仕方なしとしても現内閣に固執の責任は無く剩へ現内閣は對支方針の一新を中外に宣言して居る以上速に廢止すべき筈であるに游意未決の間に往苒日を消して居る、一旦之れを廢しても之れに代るべきものを作らうなどゝ呼號する、顧ふに日本政府當局の對支方針は從來二三にもなり三四にもなる、例へば軍人の謂ふ所と外交官の謂ふ所と大へん異る塲合がある支那は其何れが日本の眞意なりや殆ど取捨に迷ふ、一方で非常な疑惑を懷いても他方で稍安心の胸を撫で卸す事も無いでは無いが之れは表面だけで實際は日本の内部では丁と最初から打合が濟んで居り或は殊更に强硬に强硬に出て或は殊更に懷柔策を旋らすといふ樣な仕組になつて居り而して根本策として有らゆる機會を利用し支那に向ひて侵略的魔手を揮ふ事になつて居るのではあるまいか、此根本策は内閣は變つても變らない、甲の内閣と乙の内閣と又甲の官廳と乙の官廳と甚しきは甲官吏と乙實業家と其云ふ所爲す所が少し宛相違があるのは方針が二三であり態度に動搖あり意見が區々に分れて居るのでは無くして彼等は皆共謀して一定の侵略的根本策から割出して各自部分を働いて居るのに過ぎないとしか思へない。對支借款から軍事協約を暨して此感を深くするのみなら一原内閣の對支方針に就いても疑なきを得ないのである。

現内閣の對支策寺内内閣の援段政策即ち北方偏重の政策は確に誤りであつて其結果日支問題をして紛糾に紛糾せしめ惡化の上に惡化せしめ遂に拾收すべからざる邊に陷れたのは疑無き所であるが日本は僅かに其誤れるを覺りたるものか、原内閣は其就任の初めに當りて對支方針を一新すべき事を宣明した。勿論公然とでは無いけれども個人的方面から又輿論の趨向からそれと察せらる言を以て前内閣の非を改めるといふ一種微妙なる意味を暗示した。それから日本は政府及び國民の對支態度の上に遽に大變化

を來した、殆ど別國の感があると評しても差支ない程の大變化である、政府だけに就きて謂ふも援段政策は放擲せられ現在及び將來に禍根を成す所の借款は中止せられ眞に面目一新の感がある。併し乍ら面目の一新と同時に實質が一新したであらうか、之れ大なる疑問であつて前に軍事協約に關して述べた如く肝腎の所へ行くと前内閣と少しも變化が無く消極的には着々舊惡を改むると稱するも積極的に支那の利益の爲めに計ると云ひしを聞かない、それのみならず日本の一部の軍閥の如きは政府の聲明と全く正反對に益々支那を壓迫せんとするが如き行動を取つて居る、例へば日本の對西伯利政策の如き種々の口實の下に滿洲里や齊多に多數の軍隊を駐屯せしめたのは支那に何の關係も無い樣だけれども斯くして支那の東北に勢力を扶植しやがて支那本土を壓迫せんとする策略があるのでは無いかとの杞憂が支那の多數の國民の間に起つて居るのであるが穴勝所由なき想像とも爲し難き節があるのである。

喧嘩の平和會議に於ける日支交渉の批評を試みたいのであるが公平に云ふと支那は日本の態度の侵略的なのに疑惧の眼を注ぎつゝさてドウする事も出來ないので數年間忍耐に忍耐を重ねて來た不滿を平和會議に於て一氣に解決せんとしたのである、會議中支那は日本を度外視して勝手に振舞つたとの非難が日本の上下にある樣であるけれども支那は平和會議だから殊更に日本を度外視したのではない、前述の如き經緯から支那は日本に依賴する事の寧ろ危險である事を痛切に感じたが故に如何にもして日本の壓迫から免れたい、免るゝに非ざれば到底支那の希望する萬一をも達成する事が出來ないとの決意を以て會議に臨んだのであるから自然日本と行動を共にしない場合もあつたのである、然るに日本の態度は相變らず侵略的であつて彼の山東問題の如きも曩の廿一箇條要求問題と其根抵に於て同じ調子である、諄い樣ではあるが日本の度態此は從來世界の大勢上已むを得なかつたとの辯解は一應立つとしても平和會議の頃に及びては最早ウソいふ時代では無い、周圍の狀勢は著しく變化して居る、獨逸も露西亞も極東から退いた後である、何の大勢が日本をして支那を壓迫せしむるのであるか、

惟ふに當時日本に達識の士があつて舊時代の政策に膠着せず西力の支那に對する壓迫が輕減した以上は好んで之れを侵略するに及ばないその考への下に一貫したる新方針を定め支那の諒解を求むると共に支那國民の久しく希求して已まざりし日支提携の實を示す爲めに努力したならば平和會議に於ける兩國の地歩は更に一段の進展を見たに相違なかつたのである、不幸會議中日本と支那とは山東問題の如きを中心に喧嘩を以て始終するの已むを得ざるものがあつた。

斯くの如くして二者正義の主張を爲し遂に喧嘩となるならば、喧嘩は決して無意義では無い妥協するも讓歩するも喧嘩の後互に切實に諒解した上でするならば寧ろ結構な事であらう、ところが日本は喧嘩の上完全に諒解して而して後自發的に或種の讓歩をするのでは無い主張する所は飽迄主張し支那側から讓歩の要求があつても劒もホロロに拒絶し絶對に讓歩の餘地無しと頑張り乍ら西洋から勸戒を受けると鞠躬如として讓歩するといふ風が見える、彼の對支借款團問題の如き日本は曾て支那に向ひて爲した

る如く滿蒙除外を强硬に力說して居たらしいが英米兩國から勸告せられて或種の讓歩をした、即ち日本は支那の要求ならば一も二も無く拒絶する、英米の要求ならば此の限にあらずとして居るとしか思はれぬのである。況んや進みて支那を日本及び其他の列國の束縛から開放する事を唱ふる形跡は更に無いのである、支那には其他種々の欲求を有して居る、領事裁判權の撤廢駐屯軍の引上關稅改正の如き其主たるものであるが之等の欲求を貫徹するが爲めに支那は今や全力を傾けて居るの形である、併し日本は更に之れに對して同情しない、勿論協力援助をする氣色も無い、啻に無いばかりか諸外國と一緒になつて反對する、甚しきは單獨でさへも反對するを辭さない、關稅改正問題の如きは日本商人が眞先に且つ最强硬に反對して居るのである斯くの如くして支那は日本から何物をも期待する事は絶對不可能なりと謂ふのは必ずしも激越に過ぐる言なりとは思はれないのである。

以上述べ來つた處は多く日支兩國官憲の間に作られた關係を見たのであるが、其結果

として日支親善の實現は大なる悲觀に値すると思はるゝのである、併し乍ら之れを匡救する唯一の秘鑰は繫りて兩國々民の直接關係に存しはしないかと考へる、今迄は支那が日本を怨むと云つても其怨みの的は日本政府であつた、一般排日運動の如き國民對國民の排斥運動も有つたには有つたけれども之れは頗る見當違ひを免れなかつた場合も無いでは無かつた、と云ふのは日本政府の支那に對する遣り口は支那の怨みを買つたばかりで無く日本國民の間にも不平の聲を聞いたからである、即ち日本政府は日本國民の希望する所でも無い行動を支那に向ひて取つたのである、故に日本國民が直接に支那國民に接觸し胸襟を披きて談じたならば支那國民の希望の何たるかは立どころに諒解される事と信ずる、國民外交の提唱は久しき前に聞いたのであるが完全なる國民外交は未だ發生しないのであらう、今後は眞箇の國民外交を以て公明正大に折衝したならば日支親善必ずしも不可能ならざるは勿論である。

願みれば日本國民の對支感情が此の數年間に著しく變化したのは事實である、日清戰爭當時以來、國民の頭にコビリ着いて居た『支那人は日本人より一段劣等な輕蔑すべき人種である』との思想は大部分取れた、コウいふ思想は當時國民敵愾心を鼓舞する爲めに爲政者の宣傳から發生したものであつて戰爭の役には立つたけれども其後ドレ程日支の接近に累ひしたか知れない、斯る思想は速に撲滅しなければならぬ、併し幸にも此數年間日支關係が東洋の問題たるに止まらず世界の問題と目せらるゝに至りてより日本人の大部分は支那人を所由なく輕蔑する樣な事は頓に消失したかに見ゆる。之れは日支關係の將來の爲めに大に慶祝に堪へない所であつて眞の意味の日支融和の端は此處から發するのでは無いであらうか。併しソウは謂ふものゝ未だ兩國民が完全なる諒解の下に理想的に國民の實を示し得るかといふと現狀に於ては到底大なる疑問を免れないのである、如何にも日本人は支那人を劣等視しないといふ事はある、けれども眞に日本は東洋の先覺者であるとの見地から支那の開發を支那の利益の爲めに心から希望して居るとは思はれぬ事例が屢々吾人の耳目に觸れる、一體日本人は支那を

何と見て居るかと謂ふと支那は日本の物資供給地なりといふ樣な事を平氣で發表し居る、支那は日本の爲めに物資を供給する國である、換言すれば支那は日本の手段として存在する國土であると云ふのである、之れでは支那は日本の植民地なり屬領地なりと云ふと少しも異らぬでは無いか、根本に斯かる不合理な思想を抱いて居るからして日本人の多くは支那に行き支那人を相手とする場合には常に金さへ儲ければ何をやつても構はぬ、支那を開發する支那を援助すると云つても結局は自分が儲け自分の利益となる樣に計畫を旋らすのである、其例證としては彼の阿片密輸入問題の如き其關係者は必ずしも日本人ばかりとは限らぬ、其他の外國人も有るには有るが併し日本商人が最も多きを占め且つ最も頻繁であるのは否む事は出來ない。私は一人の學生を或る地方の農林學校に入學せしめて居るが彼の語る所に依ると其學校の風儀は極めて堅實であるとの事であるが多くの學生は口々に『日本は狹い、吾々の活動すべきで天地は無い、將來は支那である、支那こそ吾々の學問と技術とを實地に應用すべき壇場である』と高唱して居るそうである。無心に聽けば何の事も無いやうであるが支那人たる私から謂へば實に驚く可き宣言と言はなくてはならない、日本人は斯くして學生の時から支那を侵略し併呑しやうと掛つて居る、日本人は自國の開發の爲めに敎育されるのでは無い、他國を掠奪する爲めに敎育されるのである、戰慄すべき國である、かういふ風に考へざるを得ぬのである。

現に日本人は時々斯う曰ふ『支那人は遂に濟度すべからざる國民である、支那の爲めに熱心事に當り親切を盡すのはモウ倦々した』と、之れが支那南北睽離の問題を初め內政に關するものならは致し方も無い、其通りである、尤も之とて日本には何の關係無いとも云へば云へぬ事もないが私は支那人として支那の內政紊亂は非常に遺憾に思つて居る此事は疑ひ無いのだから之れに對する外國の同情は決して疎に思ふもので無い、併し乍ら之れは日支の關係即ち日本の利害にも直接影響ある關係に就いて云ふのならば私は敢て反問したのである『日本は支那に對して果して何程の親切を盡して吳

れたのであるか』と。親切は盡しに盡したに拘らず支那人は無理解で更に進歩の模樣が無い、そればかりか遂に日本を排斥するといふのならば支那人は寔に濟度すべからざる國民で之を啓發するのは前途頗る遼遠であるからモウ倦々したと斯樣に考へられても致方が無いのであるが、親切は盡して吳れず殊に日露戰爭當時の如きは我から日本の援助を希求したほどだつのに日本は更に耳を藉さずに置き乍ら今更排日運動が起つたからとて憤慨し支那人の賴み難きを罵倒するは矛盾も甚だしいと斷言しなければならない。

顧ふに世界は此の大戰を界として、其の思潮に非常なる變化を來した、彼の帝國主義の如き舊式な思想は全く影を潛めた、恐らくは日本の爲政者にも、帝國主義的傾向は其の跡を絕つたであらう、僅に囚はれたる政治家が有つても長く之れを支持するに堪へまい、從つて日本の今後の對支政策は順次新時代に添ふ樣な善き傾向を帶びて來るものと豫期される、誠に喜ぶべき事であつてどうか必ずさうあらしめたいと希望して居る、日本と支那とは何れより見ても相爭ふ事は不得策なるのみならず殊に對世界的には是非相互の協力を必要とするのである、大戰は終つたが列國の均勢は却つて益々破れ易くなつた、國と國との大小强弱が著しくなつたのだから其間の離合集散は愈々面倒になつた、就中吾人に取りて注目すべきは人種問題であつて白色人種と有色人種との爭ひは今後逐年激しくなるのでは無いかと思はれる、此時に方りて、日支兩國が閑葛藤を繰返して居たのでは兩國の運命は果して如何に成り行くか測り知る可からざるものがあるでは無からうか、上來私は日支間題感情の衝突を來した因由に就いて備さに述べた、成程一時は兩國の間に行違ひを生じた事實がある、併し最早行違ひを行違ひの儘放任して置く事が不可能になつた、世界の大勢が事の不可能を餘儀なからしむるのである、私の如く長く日本に住み日本人と接觸する多くの機會を持つた人間から謂へは日本國民は決して支那人と互に諒解し難い國民ではない、極めて放膽的に胸襟を披く人さへもある、相互に經驗を以てすれば、善く相互に諒解されても居るやう

である、故に進んで全國民と全國民とが完全なる諒解に到達するのも強ち至難ではあるまいと思ふ、それには第一に支那が日本に疑惑の眼を向けない事であるが日本も亦支那をして疑惑の念を懷かしめざる樣適當の處置を取る可きである、而して日本は先づ其爲政家に於て或る一定の方針を以て支那に對し次に一般國民も亦利己主義の態度を捨てゝ眞に東洋否世界の平和の爲めに兩國の提携を圖るならば之れやがて日支兩國をして世界に重きを成さしむる所以であつて私は斯かる時代の到來の一日も速ならん事を念々希望して已まないのである。（完）

西伯利出兵の總勘定

軍閥功罪の批判

内田外相が伯爵となり、田中陸相や大谷前司令官が御揃ひで授爵の恩典に浴したのを見ると現政府は我對露政策を成功の一部に數へて居るかも知れないが事實は御覽の通りであつて出兵當初から現在に至るまで徹頭徹尾失敗の連續である。現に齊多を撤退し後貝加爾を捨て哈府方面を引揚げて沿海洲南部に集合し緩衝國樹立運動を見物しながら越年した所は何の事はない西伯利を火事場と心得て兵を動かした軍閥が、見事に米國の非常線に引掛り過激派からは敬遠され二進も三進も行かなくなつたテレ隠しに吾々は西伯利の秩序維持及び在留邦人の保護に努力したのだと尼港事件などは忘れたやうな顔をして右手で窃つと口を拭きながら、左手では勳章を受取らうとして居るの

だ、軍閥は其れで好からうが、其れでは黑龍州の雪中で全滅した田中大尉や、尼港事件の犧牲となつた六百有餘の同胞は永久に浮ばれまい、又國民としても之を軍閥の餘興として看過するには餘りに事態が重大過ぎる。爰に軍閥の罪滅ぼしと云ふ意味で西伯利を舞臺として行はれた我國最初の政策戰に對し嚴正な批判を加へ併せて軍閥功罪の總勘定を試みたいと思ふ。

出兵の動機

出兵を翹望した軍閥の腹を割つて見れば、勿論我國の自主的出兵を希望し且つ單獨の出師を期待したのである。所が實現された出兵は案に相違して立派な他動的出兵となり剩へ痛し痒しの聯合軍が出來上つたのである。從つて爰に至る迄の動機は頗る複雜であつて之を分てば大體一、英佛の慫慂二、露國就中西伯利の形勢三、軍閥の野心四米國の出兵勸誘等である。

英佛の慫慂　英佛兩國が極力我國の出兵を慫慂したのは對獨戰の不利な形勢を轉換したいと焦慮した結果である。故に英佛は其以前に於て直接歐洲戰場に對する日本軍の遠征をも希望して已まなかつた、殊に露帝國の解體後は其希望が一層熱烈となつた、併し道の軍閥も歐洲戰場への直接出兵には二の脚を踏んで耳を傾けなかつた、一方英佛兩國も當時に於ける船腹の不足や、輸送に多大の時日を要するのに鑑みて歐洲戰場へ日本軍を引出することは斷念して居たらしい、併し苦しい時の神頼みで何とかして餘力ある日本軍の援助を得たいと云ふ念を絶たず窮餘の一策として案出したのが西伯利出兵の慫慂である即ち英佛の眞意は先づ日本軍を西伯利に出動せしめ當時西伯利に擡頭し始めた反過激派軍との協力を促し逐次西に進んで烏拉爾西方地帶に到着したら其處に對獨新戰線を形成せしめ、之に依つて獨軍の勢力を東方に牽制したいと企圖したのである。

露國の形勢　勞農露國の眞相は現在でも明瞭でないが當時は尙更曖昧であつて實は過

激派の眞相さへ窺知し得なかつたのである、從つて我政府及軍閥はレニン政府の基礎を漫然薄弱なものと判斷し、其混亂狀態を放任して顧みなかつたならば、露國活殺の權は獨逸の掌中に歸し轆て獨禍は西伯利一帶に東漸して來るものと考へたのである。尤も當時の歐露が獨逸對聯合國の外交戰の渦中に置かれたのは事實である、即ち獨逸はウクライナを援けて新政府を樹立せしめ、又露大使ミルバッハをして南部高架索の分離に斡旋させ遂に其獨立を聲明さした、之に對し英米佛三國はムルマン鐵道が冬季露國に對する唯一の連絡線たるを認め、之を聯合國の勢力範圍に置く必要から反過激派を標榜せるムルマン地方議會と握手し協力して同地方に侵入する獨逸勢力の驅逐を準備し約二萬に近い兵力を以て干涉に着手して居つたのである。飜へつて西伯利の形勢を見ると武力を擁して過激派に對抗して居たものには、浦鹽占領後再び北進を開始したチエック軍先着隊、オムスク附近からサマラ附近の西伯利鐵道沿線で過激派軍の掃蕩に全力を傾注して居るチエック軍主力、サマラ附近で反過激派政府を組織し叛旗を飜へしたドウトフ將軍の指揮する哥薩克及我軍閥が糸を引いて滿洲里附近に出沒せしめたセミヨノフ軍等であつた、更に極東當時の政情は何うかと云ふに、浦鹽にはデルベルを中心とする西伯利政府、ニコリスク西方露支國境に近いグロデコオにはホルワットを中堅とする極東政府があつて對峙の姿を爲し、其勢力は伯仲の間にあつた、併し浦鹽の列國領事團は其孰れをも承認せず形勢の觀望に餘念がなかつた。

斯かる形勢を看て取つた軍閥は若し此際、我國が兵力干涉を加へて反過激派政府及び政府軍に援助を與へたならば、獨墺勢力の東漸を阻止し得るは勿論、彼等の夢想せる期待を極東西伯利に實現し得べしと過信し、出兵宣傳に全力を注いだのである。

軍閥の野望が出兵の一大動因と成つたのは毫も疑ひないのだが、軍閥の野望は何所迄も軍閥の野望であつて、大多數國民の與り知る所ではない、由來軍閥が偏狹なる愛國心を振翳して外交に容喙し、動もすれば二重外交の弊を馴致して國策を亂調子に陷れ結局國家の不利益を惹起するのは彼等の常套的妄動である、軍閥が時代の推移と沒交

渉なのは今更言ふ迄もないが、彼等の頭腦は餘に簡單であり、彼等の考へは驚く程一本調子である、彼等出兵を熱望して已まなかつたのも、畢竟西伯利を火事場と心得た點に出發し又利害の密接な現今の國際關係を無視したのに基因して居る、忌憚なく言へば彼等は世界に唯日本と露國とが相對峙して居るかの如き考へを以て、一切の事件が單に對手國間の交渉だけで意のまゝに解決の着くものと鵜呑にして掛つたのである其所で彼等は外、英佛兩國の慫慂を奇貨として之に合槌を打ち、內出兵反對者を非國民呼はりし乍ら、英佛に對する關係と國防自衛の必要とを力說し極力出兵熱を煽つたが、國內の案外冷靜なのを看て、更らに獨禍東漸及び過激思想侵入のプロパガンダを試みた、即ち哈爾賓を中心として僞電虛報を連發し、現狀に放任せば過激派及び獨墺俘虜は相提携して遠からず、北滿及び朝鮮國境に迫るのであらうと傳へ、一方セミョノフを傀儡として滿洲里附近の危機を過大に流布し、我居留民の生命財產は旣に過激派及獨墺俘虜の手に委せられたやうに吹聽したのである、加之別にホルワット政府に對しても物質的援助を與へて有產階級露民を藥籠中の物とし、我國の出兵は一般露人の希望であるから、此際出兵せは西伯利の露國人は簞食壺漿して迎へるであらうと吹立てた、併し國民も容易に其手に乘らず政府も亦米國の態度に懸念して出兵に同意しなかつた、其處で軍閥が最後の智囊を絞つた方策が斯うだ。

我國は大戰參加以來何れ程の貢獻を爲したか、靑島を攻陷し東洋及南洋の海上に於て對獨作戰に參加しては居るが、之を英佛伊諸國の努力に比すれば九牛の一毛に過ぎぬ、是れでは我國の代表者が將來平和會議に參列し得るや否やさへ疑問であつて幸に參列し得たとするも恐らく發言權を與へられまい、果して然らば發言權を確保する手段としても、此際英佛の慫慂に從ひ斷然出兵するのが得策ではないか。

若し我國が英佛の希望を容れ、遠く烏拉爾を越えて西進し、反過激派及びチェック軍と協力して、對獨東部戰線を復活する覺悟で兵を動かすならば誠に御託宣の通りだか極東三州に腰を据ゑて其眞意を疑はれるやうな勝手な出兵を前提としては列國の非難

を買ふ資料には供せられても、平和會議の發言權に影響のあるべき筈はなかつたのである、然るに幸か不幸か此意見には外務省内にも共鳴者があり、故本野子の如きは其一人であつた、當時軍閥が何故にサ迄出兵を翹望したかに就いては勿論隱れた事實がある、軍閥は西伯利問題の起つた當初から、早晩出兵するものと腹を決め、セミヨノフの代表者が上海へ武器の購入運動に來た頃から、金箔付きの支那浪人中島某私設公使と謳はれた西原某を始めとし多數の滿洲ゴロに尠からぬ運動費を與へた許りでなくセミヨノフの軍隊編成に對し無鐵砲な援助を與へた爲に、機密費などでは追付かず豫算に大穴を開けた結果、是非共出兵を斷行し臨時軍事費で補塡しない限り、瀰縫のしやうがないと噂されたのが其れだ。斯くて軍閥の放つた宣傳は意外の功を奏し外務省との意見も相當に接近し政府の方針も亦略確立したが、唯米國の意嚮一つが殘る問題となつた。

米國の勸誘是に於てか政府は米國政府に對し出兵に對する意嚮を徵した、然るに米國は何等回答を與へぬのみか非公式にも贊否の意を明かにしなかつた、其所で政府は米國の諒解なしに行動を開始するのは累を後日に胎す虞れあるに鑑み、暫く形勢の推移を待つことになつた、然るに浦鹽に於けるチェック軍の蹶起は俄然極東の形勢を一變し、チェ軍救援の叫びが列國の間に起り大正七年晩春に至つて其聲は絶頂に達した、機を見るに敏な米國は七月八日、逆に我國に對しチェ軍救援を目的とする西伯利出兵を撤議して來た、併し從來の經過に徵すると米國の新提議は我國に對する一種の條件付回答となつたのである、該提議は總兵力を二萬五千に制限し而も英米佛伊日より共同に出兵しやうと云ふので、軍閥の腹案とは頗る距離があつたが、彼等は一度出兵したら其後は何うでもなると高を括り贊意を表した結果、爰に政府の態度も確定し兎に角八月上旬から作戰が開始されたのだ。

派遣軍の行動

大正七年夏の出兵以來、派遣軍今日迄の行動は討伐實行期、コルチャック全盛期、撤兵準備期の三に區分して觀測するのが便宜である。

討伐實行期七年八月第十二師團が沿海州方面から北進を開始し、九月下旬第七師團と協力して黑龍鐵道全沿線を占領し、一先極東三州の過激派を四散せしめた迄の作戰經過は、と云ふと大袈裟で實は兎狩りに類したものだが兎に角神速であつて非難すべき點はない、討伐の一段落後七年の冬から八年の春にかけて、政府は七萬三千四百名であつた出征軍を二萬五千六百名に激減した、是れ豫後備軍人を復員して歸國させた結果であるが、其背後には奇怪な事實が潜んで居る、協定に三倍した兵力を出したから米國に對する申譯の爲かと云ふに然うではない、軍事費節減の爲めかと云ふに素より違ふ、事實は第十二師團管下の在鄕軍人を技師、職工等に使用して居た北九州の工業家から苦情が起つた爲めである、北九州一帶の在鄕軍人は靑島戰にも召集されて今度は二度目である、國家總動員の場合なら致方ないが、僅に二箇師團を出征させるなら何故に日露戰役以後一度も動いて居ない他師團を選ばなかつたのだと云ふのが苦情の根本だが、此點は動員を業とする軍閥の見事な失策である、其後師團の交代が幾回か行はれたが、孰れも勞働の平均、勳章の分配以外に意味はない、唯一つ戰術上許し難き過失は、尨大なる極東三州を僅か二箇師團で無理な守備を續けた結果、兵力不足の爲に田中大隊を全滅さした一事である。

コ氏全盛期オムスク政府の執政官コルチャック總督の全盛期は派遣軍の冬眠期とも謂ふべく、英佛伊三國が極力コルチャックを援けて歐露の過激派軍に當り全露統一に努力して居た間に、我浦鹽派遣軍は一歩も貝加爾湖以西に踏み出すことなく極東三州の守備を續け、コッコッ小討伐を繰返して居たに過ぎぬ、尤も派遣軍の特務機關だけは哥薩克を相手に極東三州の統一に苦心して居たが、其後コルチャックの勢力愈々加はり、オムスク政府が英佛伊等の諸國から承認されやうとする程鞏固となつたのに驚き俄に二三の武官と加藤大使とをオムスクに派遣しはしたものゝ當時は既に英佛伊三國

が遺憾なくオムスク政府と諒解を得た後であつたので、遲れ走せに飛び込んだ彼等は殆んど取付く島がなかつたのだ、併し幸か不幸かオムスク政府は後に瓦解したから、軍閥外交も何うやら襤褸を出さずに濟んだが、適切な處置としては英佛伊諸國のオムスク方面へ西進した當時、我國も亦多少の軍隊及び適當な代表者をオムスク方面に特派すべきであつたのだ。

撤兵準備期　大正八年春季に於るオムスク政府の聲望は赫々たるものであつて、執政官コルチャックは近く全露を統一する偉勳者であらうと想像され、列國亦近くオムスク政府を全露政府として承認するであらうと觀察されたが、北露反過激派軍の戰勢不振とオムスク政府軍内に起つた高級指揮官の内訌とはオムスク軍を不利に陷れ、六七八の三ヶ月は敗戰許り、其後は全軍總退却の悲境に陷り十二月には根據地オムクスを占領されて全線潰亂の狀態になり、コルチャック執政官は翌九年二月七日、辛うじて單身イルクーツクに到着したが、同地の社會革命黨は彼を捕へ國事犯人として死刑に處した。之を傳へ聞いた過激派は再び隨所に擡頭し、イルクーツク、ウエルフネウジんスク、武市、哈府、ニコリスク、浦鹽等に相前後して政變勃發し西伯利一帶は形勢逆轉して復も過激派の支配する所となつた、併し二度目に出直した過激派は餘程周到な打合せが出來たと見え、各地共に從來の態度を改め、武力的抵抗を全廢してプロパガンダ一點張となり、我派遣軍に討伐實行の口實を與へず巧に利腕を封じて傍觀的態度を執るの餘儀なきに至らしめ而も其裏面に於て排日的對外宣傳を頻發し第三國の疑心を利用して我駐屯國を退撤させやうと腐心した。

我軍を敬遠　後日黑龍州で押收した過激派の書類に徵すと極東過激派の執つた此態度はレニン府の訓電に基いだ處置であつた事が明瞭になつた、閣議の結果强ひて討伐を行るなどと云ふ訓令が派遣軍司令部に傳達されたのは此頃であるが、實は先方で我國を觸らぬ神として敬遠し愼重な態度に出た爲に、事實上討伐のしやうがなかつたのだ例の尼港で日露兩國の第一回衝突が演ぜられたのも丁度此頃であつたが通信機關を缺

いで居たので全く知らずに過したのである、忌憚なく言ふと既に對手のなくなつた昨九年の早春は全部の撤兵を斷行すべき好個の見切時であつたのだ、所が無名の師を動かした軍閥は空手で凱旋しては體面が保てぬとでも考へたのか、何か土産を握りたいと其儘西伯利に腰を据ゑた、併し其後の派遣軍は日を追うて落目となり、三月には黑龍州を六月には後貝加爾州を、又引續き哈府附近を抛棄するの己むない破目に陷りスバスカヤ以南の沿海州に押詰められて越年したのだ、而も露國側を顧みると此二十五日には齊多に憲法議會が召集されやうとして居る、まさか今更討伐でもあるまい、政府及軍閥は何を夢想して居るのか知らぬが、此期に及んでも尙は派遣軍の駐屯を續けるのは全く無意味だ。

尼港事件

軍部の失策　對手が外國だと戰線同樣實彈を携へた忠實な步哨が守則を嚴守して其職責を全うした事柄に對してさへ、大使軍部司令官が煎餅のやうになつて遺憾の意を表する、所が尼港事件のやうな重大な事柄でも、對手が國民だと急に反返つて仕舞ふ、惡い癖だ、若し當時軍事當局が虛心坦懷に其失策を謝し國民に對し赤裸々に遺憾の意を表したならば、國民は與に悲しむとも決して追窮はしなかつたらうと信ずる、併し天災だから何も責任はないのだと事もなげな言草を聽くと是非共一言なきを得ない。守備隊全滅黑龍江の流もオコツク海の水も、冬季堅氷を結んだのは開闢以來繰返された現象であらう、北部薩哈嗹州一帶が氷雪に蔽はれて海陸共に尼港との交通が杜絕したのは大正八九年に始まつた流行ではあるまい、其尼港に守備隊を配置したのは海軍軍令部の要求に基いたのではあるが、兎に角居留民保護の爲に危險を感じて、守備隊を特派し、過激派の來襲に備へる目的で冬籠をさせたのは事實である、其尼港守備隊がバルチザン部隊に襲はれて苦戰に陷り、居留民諸共に全滅したのは兵力が過少であつたのと增援隊急派の途がなかつた爲である、何が天災なのか、何うして責任がない

のか、地震や落雷とは譯が違ふ、軍事當局が敗けても見殺しにしても責任はないのだと云ふなら、勝つても功があつても金鵄勳章は要らぬ筈だ。

用兵を誤る　用兵上から觀察すると派遣軍司令部が尼港に守備隊を配置したのは適切な處置であつて毫も非難すべき點はない併し其實行に際して守備隊の兵力及編組（即ち各兵種の配合）守備隊長の人選、主力部隊即ち哈府方面との通信方法、萬一の場合に於ける救援方法等に對し相當の注意を拂ふたか何うかと云ふ點に想到すると、遺憾ながら派遣軍司令部及び第十四師團司令部に著しい手落のあつたことを認めざるを得ない、若し最初から冬營約六ヶ月の間に尼港守備隊が過激派の襲擊を受けても之を見殺しにする豫定であつたとすれば、用兵の適否に批判を加へる必要なく、其考へが根本的に不都合千萬であつて國民の血を輕んずること餘りに甚だしと痛罵すべきである、之に反し眞面目に守備隊を配置したのだとすれば萬一の場合其目的を達し得るだけの實力がなくては無意味である、然るに派遣軍司令部は冬營中孤立無援の明瞭な尼港守備隊として歩兵二箇中隊を派遣して能事畢れりと考へたらしい、陸軍省の公表に據ると、其實力は大隊長の指揮する三百三十三名に過ぎず而も小銃が活用すべき唯一の兵器であつた、然るに露國側には要塞もあり備砲もあつたのだから單に歩兵許りを駐屯させたのは敵情を無視した無謀極まる編組であつた、戰術上最少限度の兵力編組としても歩兵一箇大隊、砲兵一箇中隊、機關銃六挺位は尠くも配置すべきであつたのである、餅屋である筈の軍事當局中には當時恐らく此點に着眼した者もあつたろうが、第十四、第十三、第三師團が平時編成となされたにも拘らず派遣軍司令部は依然極東三州の尨大な域地全部を握つて放すまいとした結果、兵力の不足を告げ如何ともし兼ねたので冒險的に斷行したのではないかとも察せらる、而して更に前記の兵力編組を有する尼港守備隊長に有爲の人物を充て其指揮に當らしめたならば、例令、主力部隊との通信連絡は不十分であつても又特種な增援手段を講じなかつたとしても、全滅の悲慘事に遭遇するやうなことは決して惹起されなかつたであらうと確信する。

陸軍の責任　約言すれば尼港事件突發の大動因は用兵上の失策に基いて居るのであるから其責任は陸軍側の負ふべきものたることは毫も疑ふ餘地はない元來戰術上の原則から云ふと、一地點に守備隊を派遣するに當り其兵力編組は通常團隊長が直接命ずるのである、從つて尼港守備隊に關する一切の事柄は第十四師團長が處理した筈である併し西伯利派遣軍の兵力配置は一般の攻城野戰と異り、政略上其行動は靜的であつて又多少永續性を帶びて居るから、派遣軍司令部が各師團の配備を熟知せると同時に、參謀本部及び陸軍省も亦之を熟知して居た筈であつて、僅か二箇中隊の微弱な兵力が尼港守備隊として孤立無援な氷雪の中で冬營して居ることは派遣軍司令官、參謀總長及陸軍大臣も素より之を承知して居る筈である、故に第十四師團長が假りに用兵上の處置を誤つたとしても、若し拂はれた注意が周到であつたならば參謀本部及び陸軍省の當事者も事變突發前に於て其誤りを發見し相當の注意を與へ適宜の處置を講じて然るべきである、所が事の茲に至らなかつたのに見れば、大井前派遣軍司令官に責任あるは勿論、上原參謀總長及田中陸軍大臣も亦責任の一半を免かれることは出來ぬ、從つて天災でもなければ男爵でもあるまい。

直に撤兵せよ

日軍置去り　チエック軍の西進援助と云ふ大旗を押立て浦鹽に上陸した英米佛伊日の各國軍は支那軍と合して我大谷大將を軍司令官に戴き兎も角も一聯合軍を組織したのであるが、各國軍の實際的行動を顧みると、聯合軍と云ふのは名許りであつて各國軍共に例外なく本國政府の政策を基礎として欲するまゝに振舞つて居る。即ち英佛伊三國軍は出兵後程なく大谷司令官の麾下を脱してオムスク方面に西進しチエック軍と共に反過激派軍を援けレニン政府軍に對抗し對獨新戰線の形成に努力した、米國軍はチエック軍の西進後軍隊を浦鹽哈府及哈爾賓等極東の要所要所に分屯して日本軍の行動監視と西伯利鐵道の管理とに全力を注いだ、支那軍隊は最初日露兩軍に合して過激派軍

の討伐に協力したが、極東三州の討伐終了後は主として沿海州鐵道一部の警備に任じながら、極力對露利權の回收に熱中した。而して日本軍はチエック軍の西進後、常に貝加爾湖以東各州の統一を目的とし其斡旋と援助とに腐心した、併しコルチャックの失脚を一段落として英佛伊米の諸國軍は全部當初の計畫を抛棄し、日本軍に關係なくサッサと西伯利を引揚げ、支那軍も亦昨年末迄には一兵も殘らず自國の領土内に撤退して仕舞つた。殊に隨分無遠慮に振舞つたのは米國であつて、出征する時には我國に共同出兵を提議して置き乍ら、昨年早春同國軍の撤兵に着手する時には、日本政府にも大谷聯合軍總司令官にも一片の豫告さへせず、突然西伯利引揚の聲明を發して我國の上下を驚かして居る。斯くチエック軍援助と云ふ表看板だけには各國軍とも其歩調を整へたが、其後は孰れも單獨行動を執つたので、互に疑ひを懷き互に牽制し合つて結局何の得る所もなく歸國して仕舞つた。觀方を換へれば早く引上げた國程損失が尠かつたと云ふ結果に終つて居る、所が我國だけは現在でも尙南部沿海州を占領して依然其守備を續けて居る。

軍閥不如意　元來貝加爾湖以東の全露領を占領して警備の任を全うする爲には戰術上尠くも五箇師團の兵力を要したのであるが若し單にチエック軍の西進援助だけなら二箇師團もあれば十分であつて、黑龍州内の過激派などは初めから進んで討伐する必要がなかつたのだ、所が軍閥の豫定方針は貝加爾湖以東各州の統一にあつたので、三箇師團では不足と知りながら無理な警備を斷行した爲に不測の損害を被つたのだ。其れでも所謂豫定計畫が意の如く運んだのなら未だしもだが、最初に試みたセミョノフを守本尊とした哥薩克中心の武力的統一策はテンデものに成らず、次に心持左偏して反過激派を中心とする統一策に手を染めたが、是も又ぞろ御流れとなり、今では却つて反對に過激派側で右偏の形を執つた緩衝國の製造に着手し既に九分通り出來上つたのだから、軍閥は内心窃に人事の不如意を浩歎して居るであらう。

莫大な軍費　轉じて浦鹽派遣軍が今日迄にどれだけの臨時軍費を費消したかと云ふに

歐洲戰參加以來即ち青島攻擊戰開始當時から要求された臨時軍事費の總額は七億圓を突破して居るが其内には海軍側の費消額も青島戰の軍費も合算されて居るので、實際對西伯利戰に割當られた額は、浦鹽派遣軍出征以來大正十年三月迄の臨時軍事費が約三億八千萬圓尼港樺太方面即ち北部沿海州派遣隊の出動以來本年三月迄の臨時軍事費が約三千五百萬圓、合計四億一千五百萬圓だが、現在の豫定計畫に從ふと來る三月迄には約五百萬圓の不足を生ずる計算になつて居る。尤も所謂不足と云ふのは豫算面での話であつて、現金は今尙相當に在るが、此殘額は既に契約濟みの購入物品が納入された場合には當然支出せらるべきものであるつて、差當り他に一時的流用は出來るとしても、早晩必要を豫定された額であるから五百萬圓の不足はドコ迄も不足として計算さるべきだ。又セミョフノ援助の爲に支出された費用は一千萬圓であつて勿論今では前記の臨時軍事費中から支出されたことに成つて居るが、極東の現狀に顧みると、此一千萬圓の如きは全く軍閥の餘興の爲に費消されたのだと斷言しても決して誣言ではない。

千餘の犧牲　更に將卒の損害は何うかと云ふに戰死者が將校下士卒を合して一千十七名負傷者が八百十九名であつて、其他に病死者も相當の數に達して居る筈だが其の數は陸軍省の醫務局でも未だ明瞭でない。要するに司令官を更迭すること三度、而も第三、第五、第七、第十一、第十二、第十三、第十四、第十六の八箇師團、航空隊、鐵道隊、電信隊等の特種部隊及び現に樺太方面に在る混成旅團の兵を動かし、四億一千五百萬圓の臨時軍事費を費ひ果して尙足らず、一千名以上の同胞を異域の鬼として徒に其遺族を悲嘆の涙に暮れさせたに拘らず、西伯利の形勢は依然元の木阿彌であつて出兵をせずに捨て置いたのと大した變りはないのだ、是でも政府及軍閥は其對西伯利政策を成功と誇り得るであらうか、チエックスロヴァックの民族自決運動を援けた行爲は朝鮮に對する警鐘とは成らなかつたであらうか、軍閥は大正八年八月、秋田及新潟で演ぜられた出征軍人の忌はしい行動を熟知して居る筈だが、而も尙國軍の前途に

龜裂を生ずる恐れなしとするか、言ふ迄もないが軍隊は國家の運命を賭して戰ふ場合には絶大な力だが、横に列べても縱に列べても決して思想の防遏にはならぬ、然るに政府は十年度に於ても一億圓の臨時軍事費を要求し、派遣軍の駐屯、師團の交代、艦隊の行動を續けやうとして居る、其處で記者は筆を擱くに當り、斷々乎として我軍の西伯利撤退を主張するのである。（完）

大正十年一月三十一日印刷
大正十年二月一日發行

東京市銀座一ノ一讀賣新聞社内
發行兼編輯人　三苫亥吉

東京市京橋區木挽町一丁目十四番地
印刷人　鷲見知枝麿

發行所　讀賣新聞社

393
128

終